

ヨイトマケの唄，ニコヨンの歌 — 戦後失対労働者の存在形態と社会意識 —

杉本弘幸

1 はじめに

本稿は失対労働者の存在形態や文化運動の分析を通じて、彼／彼女らの社会意識とその背景を明らかにするものです。

美輪明宏さん（以下敬称略）の「ヨイトマケの唄」は紅白歌合戦などで、皆さん、お聞きになったことがある方が多いと思いますが、従来この歌は、放送禁止歌といわれていました¹⁾。有名になる以前にこの歌を聞いていた方は、ヨイトマケの唄が最初にヒットした同時代に生きていた方や、このような歌に興味がある人以外は、限られていたと思うんですね。

当時の失対労働者を「ニコヨン」と呼んでいました。これは、諸説ありまして、東京都で最初に1949年に失業対策事業が始まりました。この日当が1日245円でした。支給されたのが、100円札が2枚と10円札4枚で「ニコヨン」だったという説があります。ただ240円のところもありますし、165円の地域もあるように、地域ごとに差があります。また等級によっても、失対労働者の日当は千差万別なので、俗語にすぎないのですが、小説などの出典を見る限り、一般的にはそういわれているようです²⁾。結局は戦後の経済不況の中で、失業者があふれ、1949年に国は失業対策事業を始めます。その失業対策事業に従事していたのが、失対労働者、いわゆる「ニコヨン」とよばれる人々です。

現在、道路工事は、行政が発注して、それを入札などで受注した土木や建設の会社が人を雇ってやっていますよね。しかし、当時はかなりの部分を失業対策事業で、雇用されたごく普通の人々がやっていたわけですから。つまり、失対労働者が学校整備や道路整備など、様々なインフラの整備をやっていたのです。京都ですと京都御所の清掃や草むしりなどが女性失対労働者の仕事でした³⁾。

では、彼／彼女ら失対労働者の研究はどういうものがあるのでしょうか。結論的には、失業対策事業は、一時的に、役に立つのだけど、こういう仕事をしていると怠け者ばかりが残るとされてしまいます。その結果、高度経済成長にも関わらず、他の仕事で雇われない高齢者や女性が、失対労働者として、どんどん滞留していきます。

こういう人たちが自立するために、失業対策事業は打ち切らねばならないという理由で、1995年に打ち切ってしまう。1995年3月に、緊急失業対策法廃止法が成立し、同法はその半世紀近い生涯を閉じました。その後、国は1年を通じて、公的な失業対策事業を継続的にしていませんね。緊急雇用というのでも、半年が限度です。基本的に半年たったら、同一の職場や仕事には継続雇用してもらえませぬ。これは失業対策事業の経験からなんですね。それで、厚生労働省は、継続的な形で公的な失業対策事業を行わないわけです。厚生労働省にとっての、ある種、失業対策事業というのは、二度と繰り返したくない政策なわけです⁴⁾。

この失対打ち切り路線が始まったのは1960年代前半です。しかし京都は産業の少ない地域ですから、このような地域では滞留層の救済には失業対策事業が非常に重要なんです。失業対策事業しか仕事がない人がたくさんいるからです。

戦後失業対策事業の研究では、失業対策、福祉政策として一時期は役に立ちますが、高齢者、女性などが滞留している所以他们の自立のために失対事業をやめようという結論がでます。それに反対する人たちも当然います。本格的に失業対策事業の打ち切りが開始された時も、産業のない地方、例えば福岡県の筑豊地域のように炭鉱がだめになって大量に失業するため、その代用として失対事業をするんだとか、こういう産業がない地方では、打ち切り直前においても非常に重要な役割を果たしているんだという研究がたくさんあります。一方、寄せ場研究というのがありまして、釜ヶ崎とか山谷などの簡易宿泊所街に居住している人たちの研究はたくさんあります。失業対策事業の全国的な政策史研究とか調査研究とかを使った「寄せ場研究」というのはたくさんありますが、それ以外の失対労働者関係の研究というのは同時代の社会調査を除いてはほとんどありません。特に歴史学では、管見の限り、私が最初なのではないかと思っています。彼／彼女らが集まった自由労働組合（以下、自由労組と省略）についての研究も60年代以降に集中しています。1940、50年代を対象とした社会運動史や労働運動史の研究では、自由労組の運動というものは断片的にしか、とらえられてきませんでした。

なぜかという、ルンペンプロレタリアートという言い方がありますが、いつ裏切るかわからないようなルンプロは研究対象にならないというようなマルクス主義的な観念

がありましたから、企業に勤めている正規労働者とか、自立的に主体形成をしている市民とかに分析が集中されてきたわけで、失対事業などに滞留しているような人々の運動史分析はほとんどされてきませんでした。わずかに各府県の失対事業史とか全日自労の各府県支部の記録に、被差別部落の人や在日朝鮮人が非常に多かったということがエピソードとしてたくさんあるのですが、多かったという以上のものではありません。京都においてはどうかということですが、常備労働者、正規雇用者中心の運動史叙述で、一応全日自労の京都支部の記録もあるのですが、これも出典もほとんどなくて、組合がどう闘ったかということが中心です。京都府議会史にも書かれていますが、失対労働者に関する府議会の対応が中心です。ほとんど研究がなくて、ちゃんとした典拠が明確な資料で調べていかなければならないという研究段階です⁵⁾。

女性史研究者では大羽綾子さんという方が先駆的に、民間産業があまりにも女性を雇用していない、男女の雇用機会が著しく阻害されているとして、子連れの母子世帯の女性失対労働者の問題を大きく取り上げています。大羽さんは、高齢女性の失対事業への固定という問題があって、そのうち90%が「未亡人」といわれる人びとであるということを描いています。地域女性史研究では、井上としさんが、戦前からの共産党の活動家で、戦後全日自労の婦人部長になった大道俊さんという方の評伝をお書きになります⁶⁾。

京都でやると、まさに古都京都、日本の伝統都市の典型ということで、現代都市の普遍的にもつ排除の構造がクリアになります。また、京都は部落問題の関係資料が大量に発掘されていて研究目的なら誰でも利用できるという全国的にも希有な環境で、非常に多くの実証的な研究の蓄積があります。このことでも京都を事例に研究する意味が非常に大きいものがあります。そして、失対事業の歴史的な位置についてですが、1950年代の京都では民間産業への転業が全然できません。西陣織などの伝統産業は戦時期に贅沢品が禁止になり、その影響で全く駄目な状態でした。民間産業がだめなので、就労日数なども東京や大阪などに比べて少ないわけです。ですから、失対事業に頼らざるをえませんでした。しかも失対労働の大半は地元の人です。新規流入者が非常に少ないのです。京都の失対労働者はほとんど地元の人で、高齢者、女性、部落民、在日朝鮮人とマイノリティが中心になっています。大阪とか東京とかに行っても雇われることのできない、ほかに行き場のない人々です。他の地域でも全く民間産業の雇用対象とならない人たちがいました。したがって、京都の事例は産業の少ない地域の代表的な事例として普遍化が可能です⁷⁾。

では、「ヨイトマケの唄」にもどりましょう。丸山明宏、現在的美輪明宏が、最初メケメケというシャンソンでデビューし、一世風靡しました。しかし、その後反戦唄や従軍慰安婦の唄とかを作り始めるんです⁸⁾。こういう歌を集めた『白呪』というアルバムがありまして何回も再販されています⁹⁾。「ヨイトマケの唄」はこのアルバム『白呪』に収録されています。

さて、「ヨイトマケ」の意味ですが、建築現場や道路、土手普請の地固めのために、重い槌を滑車で上げ下ろしします。その時の掛け声が多く地域で「ヨイトマケ」というのです。それが語源だと言われています。またそういう建築現場や道路整備などの仕事をする人々、多くは女性をさして、「ヨイトマケ」と呼んだようです¹⁰⁾。先ほども申した通り、失対労働者はどんどん女性が多くなります。美輪は、長崎市内で被爆しています¹¹⁾。長崎も、被爆して市街地に復興が必要になっている。その整備をする土木建築関係の日雇労働に従事している友人の母親の記憶が、「ヨイトマケの唄」をつくる一つのきっかけになっているといっています¹²⁾。では、歌詞を見てもらいましょう。

ヨイトマケの唄 【作詞】丸山明宏 【作曲】丸山明宏

父ちゃんのためなら エンヤコラ
母ちゃんのためなら エンヤコラ
もひとつおまけに エンヤコラ

1. 今も聞こえる ヨイトマケの唄
今も聞こえる あの子守唄
工事現場の昼休み
たばこふかして 目を閉じりゃ
聞こえてくるよ あの唄が
働く土方の あの唄が
貧しい土方の あの唄が
2. 子供の頃に小学校で
ヨイトマケの子供 きたない子供と
いじめぬかれて はやされて
くやし涙に暮れながら

泣いて帰った道すがら
母ちゃんの働くところを見た
母ちゃんの働くところを見た

3. 姉さんかぶりで 泥にまみれて
日にやけながら 汗を流して
男に混じって ツナを引き
天に向かって 声をあげて
力の限り 唄ってた
母ちゃんの働くところを見た
母ちゃんの働くところを見た

4. なぐさめてもらおう 抱いてもらおうと
息をはずませ 帰ってはきたが
母ちゃんの姿 見たときに
泣いた涙も忘れ果て
帰って行ったよ 学校へ
勉強するよと言いながら
勉強するよと言いながら

5. あれから何年経ったことだろう
高校も出たし大学も出た
今じゃ機械の世の中で
おまけに僕はエンジニア
苦労苦労で死んでった
母ちゃん見てくれ この姿
母ちゃん見てくれ この姿

- 6 何度か僕もぐれかけたけど
やくざな道は踏まずに済んだ
どんなきれいな唄よりも

どんなきれいな声よりも
 僕を励ましなくさめた
 母ちゃんの唄こそ 世界一
 母ちゃんの唄こそ 世界一

今も聞こえる ヨイトマケの唄
 今も聞こえる あの子守唄
 父ちゃんのためなら エンヤコラ
 子どものためなら エンヤコラ¹³⁾

この歌は、聴いての通り、子ども目線なんですね。背景としては、ヨイトマケの子どもである歌い手が、学校で周りにきたくない子どもと、はやされていじめられて帰ってくる。お母さんは、ヨイトマケをしている「ニコヨン」なんですね。そして、苦勞の末にお母さんが亡くなります。お母さんは、子供を育てるために、ずっとニコヨンをして亡くなるわけですね。お母さんは苦勞して死んでいったが、僕はお母さんのおかげで、学校で一生懸命勉強して、エンジニアになったというストーリーなのです。お母さんは未来を子どもにかけたわけです。時代はまさに1960年代、高度経済成長のあたりなのですが、お母さんは一生、「ニコヨン」で亡くなるわけです。実はハッピーエンドのストーリーではない。しかし、息子の心の中には母親のヨイトマケの歌が今も聞こえているわけです。

もう一つ、映画「どっこい生きている」をとりあげます。これは今井正という監督がつくったものです。今井正は東宝争議で中心的な役割を演じていたので、レッドパージで、東宝を追放されます。当時、共産党の支持者となった映画人がいっぱいいました。それで彼らは映画会社から追放されます。その人たちが自分たちで映画をつくらうという独立プロができます。今井も亀井文夫や山本薩夫などと新星映画社という独立プロを作ります。「どっこい生きている」はその新星映画社と前進座が一緒に作り上げるのです¹⁴⁾。

さて、先程のシーンは親子が不法占拠でバラックに住んでいる。不法占拠なので強制代執行で潰されます。途方にくれた母子が普通の家に引っ越そうとして、古道具とか家財道具一式を公益質屋に売りに行くんですね。しかし、困窮者が多く、あまりにも利用者が多くなりすぎて、質屋に資金がなくなり、公益質屋が閉店し、布団とか鍋、釜を質に入れられなくなる。しょうがないから民間の質屋に売って、何とか当座のお金をつくっ

で引っ越そうとする。こういう描写でした。

この映画は、非常に興味深いものです。私は現在の視点から見ても、大変見事に失対労働者の貧困や、労働のありようなどの、失対労働者の内面に迫りつつ、それを映像化した名作といえとかがえています。

では、なぜ「ヨイトマケの唄」や「どっこい生きている」に代表されるすぐれた作品がなぜ生まれたのか。これはやはり、戦後日本社会の経験として、失対労働者に刻印されているわけですね。それを解明しないといけないわけです。

このような失対労働者の文化運動や社会意識を扱った研究は江口英一さんの研究を嚆矢にいくつかありますが、本稿では京都の事例に即して、新たな分析を加えます¹⁵⁾。

2 失対労働者の存在形態

さて、表1の全国のデータを見てみましょう。失対労働者の対象者総数は、1950年は男女合わせて約28万人で、女性比率が24.8%でした。全体の対象者総数は、1960年にピークに減っていくんですが、女性対象者比率をみると、65年にはなんと女性比率は、急速に上昇し、48.3%になっているのです。

さて、次に表2の京都のデータをみてみましょう。先ほど見ていただいた通り、全国の場合、対象者総数のピークが60年の合計約35万人ですけど、その後65年にはかなり減っていますよね。しかし、京都の場合は合計人数がなんと1951年は、登録者数が約1万人いますが、60年になっても、約1万人とほとんど変わっていません。つまり、高度経済成長の過程にあっても京都の場合は失対労働者が減っていないという状況なわけで

表1 失業対策事業紹介者数（全国）

年 代	男性対象者数	女性対象者数	合計対象者数	女性対象者比率
1950年	212840人	70187人	283027人	24・8%
1955年	200616人	112444人	313060人	35・9%
1958年	206658人	128492人	335150人	38・3%
1959年	212832人	134660人	347492人	38・8%
1960年	208621人	141589人	350210人	40・4%
1961年	200726人	145407人	346133人	42・0%
1962年	188432人	146658人	335090人	43・8%
1963年	171869人	139770人	311639人	44・8%
1964年	146639人	128957人	275896人	46・7%
1965年	131262人	122661人	253923人	48・3%

(出典)『失業対策年鑑』各年度版 ※各年9月末調査

表2 京都市失業対策事業一覧(1951-60年)

年月日	有効登録者数	適格者	窓口求職者数	紹介者数				合計	窓口アブレ	平均稼働日数
				民間	公共事業	失業対策(市吸収分)	特別失対など			
1951年11月	10630人		182954人	9037人	2500人	114318人(73242人)		125855人	57099人	15・0日
1952年4月	10613人		188190人	11893人	5648人	120078人(78088人)		137619人	50571人	17・1日
1952年10月	11131人		225009人	13911人	7997人	133121人(86889人)		155029人	69980人	17・5日
1953年4月		8977人	196116人	7931人	5988人	125601人(不明)		139520人	57096人	
1953年10月	10289人	8881人	200551人	13264人	1815人	132259人(83431人)		147338人	53213人	19・0日
1954年4月	10606人	8954人	186168人	11604人	1948人	123407人(78700人)		136959人	49209人	17・6日
1954年10月	11548人	9215人	212370人	12228人	1117人	129755人(83107人)		143160人	69210人	17・0日
1955年4月	12375人	10010人	189008人	8353人	5305人	116210人(72061人)		129868人	59220人	15・6日
1955年10月	11816人	10475人	233180人	11285人	8811人	136718人(87130人)		156814人	76366人	16・3日
1956年4月	11736人	10708人	212690人	5503人	3022人	138605人(90041人)		147130人	65560人	16・4日
1956年10月-57年9月平均	11277人	10501人	237236人	6625人	1119人	164342人(106010人)		172086人	65149人	18・3日
1957年10月-58年9月平均	10920人	10108人	231788人	4297人	896人	154515人(97270人)	13213人	172921人	58807人	18・9日
1958年10月-59年3月平均	10978人	10093人	236102人	6487人	2603人	152746人(97962人)	15416人	236102人	58850人	19・3日
1959年4月-59年9月平均	10572人	9897人	237507人	5139人	809人	159136人(100167人)	8961人	237507人	63466人	19・8日
1959年10月-60年3月平均	10475人	9773人	230454人	3438人	3518人	144110人(92989人)	18780人	170846人	59608人	19・8日
1960年4月-60年9月平均	10020人	9427人	217702人	2614人	2361人	145509人(94119人)	5471人	155955人	61747人	20・0日
1960年10月-61年3月平均	9883人	9241人	213428人	3383人	3509人	131033人(84294人)	20401人	158325人	55103人	19・9日

(出典)「京都市事務報告書」各年度版

す。

では、こういう人たちはどういう仕事をしていたのでしょうか¹⁶⁾。新聞に下京区の職業安定所の様子が掲載されています。それをみると、職業安定所の周りには、そば屋やパン屋が一杯あって、そこで朝食をとって、なんと朝6時40分からその日の仕事の紹介が始まるのです。そして、8時には紹介が終了してしまいます。ようするに、彼／彼女らは6時40分以前に職安にいかないと仕事がないのです。1時間以上、紹介をまって、やっと仕事にありつけるのです。そういう人たちの話を聞いてみると、喧嘩は多いが友情が厚い。婦人の方が男たちより元気だ。労働者は多種多様で女性失対労働者は「後家さん」が多い。「未亡人」とか男性と死別した人が多いと指摘されています。

さらに在日外国人が非常に多いとされています。これも新聞の記事ですが、市役所の市長室に6団体で陳情に乗り込んだ、その中で自由労組と朝鮮人と部落解放同盟が共同闘争を行っていることがわかります。全国的にもそうですが、京都においても被差別部落、在日朝鮮人、マイノリティと失対労働者は深い関係にあるのです。

さらに失対労働者は生まれながらの「ニコヨン」ではないのです。たいていの人は「ニコヨン」になる以前は普通の仕事をしています。商店主とかサラリーマンが大半です。63.7%は戦後の企業閉鎖とか仕事がないとかで失業した人たちです。もう一つは元自営業の人たちですね。以前は商店主をしていたけど、店が潰れてしまったという人を入れると、なんと94%は失業対策事業以前には、なんらかの定職をもっていた人々でなんですね。戦後の不景気で企業が潰れたり、商店が潰れたりして、彼／彼女達は失対労働者になったわけです。

もう一つ非常に多種多様な仕事の経験者が集まっています。ですから肉体労働者としては優れていません。高齢者もいるし、女性もいる。今だったら土木建築の専門会社があって若い人たちが多く働いていますが、失対労働者は土木や建設工事の経験がない人たちが大半です。さらに高齢者が多く、60歳以上がいっぱいいる。40歳以上を入れると6～7割を占めている。40歳以上の失業した人たちが、他に仕事がなく、肉体労働をしているというのが現状です。その中で、失業対策事業で働いているんですが、それでも足りなくて24.7%が、なんと生活保護も受給していたんですね。さらに国籍比率をみると、一般の労働者の外国人比率は2.6%ですが、失対労働者の場合はなんと9.5%です。つまり普通の京都府民の比率だと外国人比率は2.6%だが、失対労働者になると一挙に約3倍になるわけです。外国人労働者が失対労働者に滞留しているということなんですね。

こういう状況ですから失対労働者に対しては周囲に非常に差別的な目線がある。新聞

の記事をみても、市役所の人夫、つまり失対労働者が働きにきたんだけど、「なんだ、怠けている」と何とかしてほしいという投書や記事が当時たくさんあります。

実は彼／彼女らは怠けているわけではないんですね。朝5時に起きて、朝6時40分から紹介に備え、職安に行って、仕事の紹介を待っている。しかもその人たちは大半が40歳以上で、土木や建設工事をするわけです。他の投書記事ですが、「私たちの税金でこういうニコヨンの連中は食って生きている。何とかしろ」などと普通の市民がいうわけです。つまり、普通の一般市民からすると、朝早く職安に来ているとか、高齢者ばかりとか、元は普通の職業を営んでいた人だとか、そういう背景は全く関係ないんですね。次は自由党の市会議員の発言です。「街路を清掃するのに小さな車に5～6人も乗せていくのは優雅な人がすることである」。これもニコヨンの人々のことをさしているんですね。つまり、失対事業で道路の清掃をする時に、小さな車で年寄りや女性がころころ歩いている。中には子どもをつれた女性もいる。そんな仕事の仕方は優雅な国民がすることなんだと指摘しているわけです。このように「役に立たない怠け者のニコヨンたち」という意識が社会に充満しているわけです。

3 失対労働者の社会意識

では、こういう人たちはどうなるかという、どんどん失対労働者に滞留していくわけです。若い人たち、特に男性は、高度経済成長に乗って、様々な就職があります。したがって、失対事業から脱却して、一般労働市場に就職できるのです。そうすると失対事業には高齢者や女性ばかりになり、さらに女性比率がどんどん上がるという結果になるわけです。

では、表3をみてもらいましょう。日雇労働者の意識調査の結果をまとめたものです。まず、第1に失対労働者から脱出して、安定した職に就きたいという脱出願望と、とても抜け出ることができないとあきらめが併存しています。つまり、40～50歳になって、新しい仕事ができるかといえば、なかなか難しいわけです。

また、世間では同情もあるけれど、こんな職でいいと思ってみたり、社会観のところで「世間が同情してくれる」というものもありますが、一方で「我々ちゃんとした労働者である」「差別を感じている」「賃金が足りない」などの意見もある。だから約24%が生活保護を受けているのです。

もう一つ大きいのは集団観です。「助ける仲間が大勢いる」という項目がありますね。

表3 日雇労働者の社会意識調査(1959年)

	なんとかして他の職につきたいと思う者- 57名	この職(日雇)でよいと思う者- 61名
人生観	もっと規則正しい行き方をしたい- 48名	自由にのびのび生きられる- 9名
	もっと楽しくてボロもうけしたい- 9名	もう自分には就職する力がない- 52名
社会観	社会はこの仕事の価値を認めない- 28名	われわれはちゃんとした労働者である- 39名
	世間は我々を差別して毛嫌いだ- 29名	世間の人にはわれわれにいろいろと同情してくれる- 22名
個人観	自分がだらしないように思える- 23名	自分ではできるかぎりのことはして生きている- 46名
	自分の性にあわないし、えらい- 34名	自分の生活や力にあっている- 15名
職業観	将来のみこみがないし、不安だ- 42名	屋外の労働が適している- 26名
	もっときれいな人目にたつ仕事をしたい- 15名	探したが職がなかった- 35名
生活観	家族の者がいやがる- 29名	安月給より日給の方がいい- 30名
	収入がぜんぜん足りない- 38名	この収入でどうにかやっていける- 31名
集団観	仲間とうまくつきあえない- 25名	仲間と協力して我々の生活を守っていく義務がある- 35名
	弱い者はいつも損ばかりする- 32名	助け合える仲間が大勢いる- 26名

(出典) 全日自労京都府支部・同志社大学社会科学部研究室・西京大学児童福祉学研究室・京都市民連・京都府職労『日雇労働者の実態』1959年, 20頁

つまり、失対労働者間に仲間と協力していくという、一種の共同性がある。しかし、若い人はすぐ抜けるし、当然就職した人は抜けてしまうわけですね。そうすると就職できない人ばかり残り、同じ構成員が固定化します。それによって滞留するんですが、同時に共同性や仲間意識も熟成されるのです。

では、具体的な事例をみてみましょう。新聞記事でとりあげられている村上喜代司さんは昔、満映の監督だった人です。元女優と結婚したんですが、日本の戦争での敗北による引揚でだめになり、職を転々として、家族のため、ついには「ニコヨン」になった。彼は当時45歳で、映画会社にいたという経歴ですが、年齢的に再就職は不可能です。彼はそれをよくわかっているのです。そこでかつてのキャリアを生かして、「ニコヨン文士」を名乗って演劇サークルをつくった。もう一つの彼の活動は「文化観光都市京都」を守るために、ごみ箱にコールドールを塗る活動をしているのです。それでゴミ箱に蚊とかハエがこなくなるんですね。こうして彼は文化の向上に貢献できる仕事をしていると思います、仕事がない連中にも「お前、一緒にやれ」といってやらせる。こういう活動は一銭にもならないし、就職ができるわけでもない。しかし彼は生きるための支えとして演劇サークルを作ったり、ごみ箱にコールドールを塗っているのです¹⁷⁾。

このような労働者の演劇サークルは、当時「自立演劇」といって、戦後、たくさんサークルができます。職場のサークルで演劇をするんですね。1954年には第13回京都自立演劇コンクールをやる。このコンクールに、自由労組千本分室では「日雇い地蔵」という

独自のシナリオをつくって上演します。周囲からは自労演劇サークルが生まれ、創作を發表したことが大きい。職場演劇はいろんな点で困難が多く、非常な努力を要求されるが、自労の場合はその困難の条件の中でよく活動を続けているといわれています。つまり、周囲から見ると失対労働者達が自立演劇サークルを創立したこと自体が大きな成果だったといっています。

さて、「日雇い地蔵」のシナリオなのですが、ニコヨンがひょんなことから、お地蔵さんになって、願い事をもってやってくるいろんな人の願いを聞くという話です。ポイントは地蔵のところにホームレスとか、酔っぱらいの軍国主義者とかやってくる。その中に、観光宣伝に憂き身をやつす京都市長、高山義三という市長が登場して、これを皮肉っている。ついに地蔵さんになった日雇労働者の要求を市長が受け入れるという、ストーリーだったのです。

さて、このニコヨン劇団に参加していた人たちは、どういう人たちだったのでしょうか。他の劇団は公務員とか郵便局とか大企業の組合なんですね。若い人が多いわけです。しかしニコヨン演劇サークルは、おじちゃん、おばちゃん、子持ちばかりなのです。若い人がほとんどいません。自労演劇サークルのような高齢者の多いサークルはないんですね。

さらに「ガード下」とか「ニコヨンの歌」のシナリオを書いた在日朝鮮人の権 大奉(安藤大吉)という人がいます。彼がつくった自立演劇サークルは7人いました。サークルをつくった理由はお金がないので芝居とか生活するのに精一杯である。それなら自分たちで芝居をやるんじゃないかというものでした。失対労働者は、昼間は働いているので、仕事の余暇に演劇を練習しているわけです。さらに権 大奉を中心に2本の台本をつくったんですが、「ニコヨンの歌」は、大変な反響を呼び、コンクールで優秀賞をとった。この人たちも元呉服店主とか工場に勤めていた人とか、そういう人たちばかりです。我々は日雇労働者に安住する気はないが、日雇労働者を一般の人たちに知ってほしいという思いをもっていた。表4を見ての通り、権 大奉はニコヨン自立演劇サークルのことをやりながら、1959年から全日自労京都府連の幹部でもあるのです。この人たちは失対労働者の自立演劇サークルとして上演を続けます。カンパがあって上演活動が続けられます。

さて、「ニコヨンの歌」のシナリオは『テアトロ』という雑誌に載っています。現在でもある演劇の専門雑誌ですが、当時は新劇が中心ですね。この雑誌にシナリオが載るといのは、ある程度、彼の作品は認められているんですね。このシナリオは失対労働者

表4 全日本自由労働者組合京都府支部役員一覧

年代	メ ン バ ー
1949年 第1回大会	委員長 灘井五郎(西陣) 副委員長 永田呑海(西陣) 副委員長 水谷一雄(千本) 書記長 斉藤恒雄(西陣)
1950年 第2回大会	委員長 灘井五郎(西陣) 副委員長 永田呑海(西陣) 書記長 斉藤恒雄(西陣)
1951年 第3回大会	委員長 灘井五郎(西陣) 副委員長 永田呑海(西陣) 副委員長 岩井一之進(千本) 副委員長 荒木信一(伏見) 書記長 斉藤恒雄(西陣) 財政局長 高橋亀(千本) 西陣支部長 吉村芳太郎(千本) 千本支部長 篠原善吉 土建支部長 藤田重次郎
1952年 第4回大会	委員長 灘井五郎(西陣) 副委員長 永田呑海(西陣) 書記長 高橋亀(千本) 執行委員 篠原善吉(千本) 山本(千本) 吉村芳太郎(西陣) 田中(西陣) 松井(西陣) 藤田重次郎(西陣) 福島幸一(大工) 川崎(西舞鶴) 三橋金二郎(伏見) 書記 尾頭誠治 松浦 斉藤恒雄 荒木信一
1953年 第5回大会	委員長 灘井五郎(西陣) 副委員長 永田呑海(西陣) 書記長 高橋亀(千本)
1954年 第6回大会	委員長 灘井五郎(西陣) 副委員長 南松志(千本) 書記長 関根芳夫(千本)
1955年 第7回大会	委員長 灘井五郎(西陣) 副委員長 小林芳一(西陣) 副委員長 南松志(千本) 書記長 関根芳夫(千本) 財政部長 大道俊(西陣) 組織調査部長 篠原善吉 情報宣伝部長 平松龍治(西陣) 教育文化部長 中井昇(伏見) 青衿対策部長 田原勲(西陣) 救援厚生部長 田中知博(千本) 執行委員 吉田政七(西陣) 大槻俊輔(西陣) 中北秀次(西陣) 中北秀次(西陣) 上本愛蔵(千本) 森谷健三(伏見) 外尾英範(伏見) 西村はまえ(伏見) 友次寿男(東舞鶴) 福林貢(福知山) 的場良太郎(綾部) 書記 西村高一(千本) 中島広海(西陣)
1956年 第8回大会	委員長 小林芳一(西陣) 副委員長 田原勲(西陣) 副委員長 田中知博(千本) 書記長 南松志(千本) 執行委員 灘井五郎(西陣) 吉田政七(西陣) 大槻俊輔(西陣) 中北秀次(西陣) 平松龍治(西陣) 大道俊(西陣) 荻野つね(西陣) 関根芳夫(千本) 吉村茂雄(千本) 篠原善吉(千本) 伊集院秀夫(千本) 萱原春美(千本) 吉田紀三郎(伏見) 山角徳一(伏見) 川端清(伏見) 舟橋成四郎(伏見) 的場良太郎(綾部) 嶋田松治郎(福知山) 谷口次郎(南舞鶴) 友次寿男(東舞鶴)
1957年 第9回大会	委員長 関根芳夫(西陣) 副委員長 田原勲(西陣) 副委員長 田中知博(千本) 書記長 南松志(千本) 執行委員 平松龍治(西陣) 吉村茂雄(千本) 梶原尚義(千本) 山角徳一(不明) 舟橋成四郎(不明) 関根芳夫(千本) 藤本ユキヲ(出町) 藤井みつ枝(出町) 林つね(出町) 島本ハツ(西陣) 大槻俊輔(西陣) 櫻井房枝(西陣) 渡辺千代(千本) 中北秀次(西陣) 荻野つね(西陣) 大道俊(西陣) 伊集院秀夫(不明) 萱原春美(千本) 灘井五郎(西陣) 川端清(不明) 森谷健三(伏見) 外尾英範(伏見) 吉田紀三郎(伏見) 国府義輝(八木)
1958年 第10回大会	委員長 関根芳夫(西陣) 副委員長 姜 判世(千本) → 10月10日辞職以降 青木幸次郎(千本) 書記長 清野敏雄(西陣) 財政部長 中北秀次(西陣) 教宣部長 中井昇(伏見) 常任執行委員 小林芳一(西陣) 南松志(千本) 奥田春枝(伏見) 藤井みつ枝(出町) 執行委員 太田美太郎(西陣) 中島宏海(西陣) 平松龍治(西陣) 田原勲(西陣) 梶原尚義(千本) 田中知博(千本) 吉村茂雄(千本) 外尾英範(伏見) 木村たね(出町) 友次寿男(両丹地協)
1959年 第11回大会	委員長 田原勲(西陣) 副委員長 太田美太郎(西陣) 書記長 青木幸次郎(千本) 財政部長 外尾英範(伏見) 教宣部長 権 大奉(千本) 婦人部長 佐野操(西陣) 執行委員 小林芳一(西陣) 清野敏雄(西陣) 平松龍治(西陣) 灘井五郎(西陣) 関根芳夫(千本) 田中知博(千本) 西村京一(千本) 上本愛蔵(千本) 森谷健三(伏見) 出口勇(伏見) 百井嘉二郎(伏見) 川本初子(出町) 林つね(出町) 鈴木秀夫(宇治) 大槻国二(綾部) 林田岩太郎(東舞鶴)
1960年 第12回大会	委員長 小林芳一(西陣) 副委員長 青木幸次郎(千本) 書記長 権 大奉(千本) 財政部長 森谷健三(伏見) 教宣部長 大村慶一 執行委員 太田美太郎 大槻俊輔(西陣) 平松龍治(西陣) 北条松之助(西陣) 武笠千鶴子(西陣) 松本コト(西陣) 関根芳夫(千本) 田中知博(千本) 西村京一(千本) 上本愛蔵(千本) 林つね(出町) 島本ハツ(出町) 外尾英範(伏見) 田中佐市(伏見) 高島富太郎(伏見) 林田岩太郎(東舞鶴) 谷口次郎(西舞鶴) 福井茂一(福知山) 堀 三郎(宮津) 畑中勉(綾部) 並河賢一(亀岡) 堀伊一郎(宇治)

(出典)『全日本自由労働者組合京都府支部 25年史年表』(1973年) 133 - 135p なおカッコ内は所属分会名である。太字は朝鮮人幹部 太字下線部付は女性幹部

には夫婦共稼ぎは許されていない。一世帯一人しかニコヨンになれないんですね。それでは食べられないので、この人たちはわざわざ離婚するんですね、戸籍を抜くのです。それだったら世帯が分かれているから、お父さん、お母さんが両方「ニコヨン」をやることができます。しかし夫婦なので、子供ができて、妊娠する。妊娠すると失対労働者になれません。クビになる。妊娠を何とかして隠そうとするんですが、旦那の方は墮胎をしようということでお金策のために血を売ります。しかし妻は産みたいと思っている。産む、産まないの口論を続ける、そして…というものです。失対労働者の生活や矛盾を鋭く描いた作品です¹⁸⁾。

こういう文化活動はどういう意味があるのでしょうか。これまで見てきたとおり、失対労働者達は、社会的上昇可能性は、ほとんどありません。現在の境遇から逃れることはできませんが、失対労働者をつづけないと、ご飯が食べられません。だけど、日々働いて、食って寝るだけでは面白くない。やりがいのある打ち込めるものがほしい。それがニコヨン自立演劇サークルで演劇をやったり、コールタールをごみ箱に塗るとかの活動になるわけですね。

しかし、自立演劇サークルは続けるのは大変なんです。舞台に人を集めないといけません。練習もしないといけません。なかなか続きません。やはり、自立演劇のサークル活動も、続いているのは官公労、公務員系組合など、あるいは大企業が中心です。しかし失対労働者達がこのような困難な活動ができるのは地域を超えた自由労組を中心とする失対労働者の共同性があったからです。40代以上の方が8割以上で、高齢女性ばかりの人々です。職安では、みんな毎日、顔をつきあわせる。しかし、住んでいる地域では「ニコヨン」といわれ、蔑視され、孤立している。しかも、みんなお金がない。失対労働者の間でいろいろと助け合あわざるをえない。そこに共同性が確立していく。滞留していく中で権利主体化過程と位置づけることができます。

4 おわりに

この報告は貧困と社会的差別のシステムの問題を問うています。今でも続く問題ですが、アベノミクスとか、特定の産業育成や金融緩和、税制改革をいくら行っても、経済的、社会的に排除される人々はたくさんいる。現在も構造は変わりません。ニコヨンが働いていた時代は高度経済成長期だった。高度経済成長の恩恵を受ける人たちは新しく就職したり、仕事ができるわけです。能力がある人はどんどん収入があがっていく。し

かし資本主義社会ですから、お金にならない仕事しかできない人々は、高度経済成長が進めば進むほど、生活保護や失対事業に滞留していくわけです。もう一つ日本は、戦前の植民地支配をしていた日本帝国から植民地を喪失した日本国となった。しかし依然として日本国内には在日外国人がたくさんいたわけですね。日本国内の労働市場から在日外国人とか高齢女性たちが、こういう失業対策事業に滞留していくというメカニズムになるんですね。

つまり高度経済成長がいくら進んでも、生活保護以下の賃金の人たちが大量にいる。統計データに出ないだけです。当時、失対事業や生活保護をめぐる、労働省と厚生省が当時、争っていたのです。厚生省からすると生活保護を減らすために、失対事業を適用したい。いまだと就労支援にもっていきたい。労働省は失業対策事業を減らしたいから、生活保護にもっていきたい。そういうメカニズムもあります。

現在でも生活保護以下の賃金水準の人がいっぱい存在しています。この人たちは生活保護ではないが、生活保護とかわらない、あるいはそれ以下の賃金で働いているのです。たとえば、アルバイトを時給900円で、フルタイムで働いても、せいぜい13～14万円です。このように、生活保護以下の賃金は今も存在しています。労働市場からの排除の構造は失業対策事業に顕在化しているということになります。

しかし人々は社会的に排除されても生きていかなければならない。そして、1人1人がいったいどのように生きていくのか。その発露や表現となるのが「ヨイトマケの唄」や「ニコヨンの歌」などの、演劇や映画になる背景があったのではないのかというのが、とりあえずの結論です。

ありがとうございました。

(付記) 本稿は、科学研究費補助金(若手B・研究代表者杉本弘幸)「1940—70年代の失業対策事業と失対労働者に関する基礎的研究」及び、科学研究費補助金(基盤C・研究代表者庄司俊作)「高度経済成長と戦後日本の総合的歴史研究—高度成長の社会史—」の研究成果の一部である。

注

- 1) 森達也『放送禁止歌』(解放出版社, 2001年)。
- 2) 米川明彦編『集団語辞典』(東京堂出版, 2000年)546～547頁, 同編『日本俗語大辞典』(東京堂出版, 2003年)465頁。
- 3) 拙稿A「1950年代「京都」における失業対策事業・女性失対労働者・被差別部落」(『日本

史研究』547号、2008年3月)。

- 4) 濱口桂一郎「公的雇用創出事業の80年」(『季刊労働法』223号、2001年)。
- 5) 以上の研究史については、拙稿B「戦後失業対策事業と失対労働者運動の出発」(世界人権問題研究センター『研究紀要』18号、2013年)を参照。
- 6) 女性失対労働者に関する研究史については、拙稿C「1950年代における全日本自由労働者組合婦人部関係史料について」(『ジェンダー研究』15号、2013年)を参照。
- 7) 前掲、拙稿A。
- 8) 美輪明宏『紫の履歴書』(水書房、2008年)。初出は大光社から1968年に出版された。
- 9) 丸山明宏『白呪』(エレクトレコード、1975年)。
- 10) 『日本国語大辞典 第二版』13巻(小学館、2002年)485頁。
- 11) 前掲、注8、63～70頁。
- 12) 前掲、注8、409～418頁。
- 13) 前掲、注9「ヨイトマケの唄」。
- 14) 今井正『どっこい生きてる』(新星映画社、1951年)。
- 15) 江口英一編『団結よひろがれ—にこよん詩集の人々 増補改訂版』(ぼるん舎、1981年)など。
- 16) 以下、前掲拙稿Aの内容に基づく叙述については、煩雑になるので、いちいち注記しない。
- 17) 『京都新聞』1955年9月3日。
- 18) 「にこよんの歌」のシナリオやこのような上演活動の意味については、別稿を用意している。